

東北ヘルプ ニュースレター

2021年イースター号

- 「地域」と「復興」：ワイズメンズクラブとの協働から 1頁
- 「愛と希望のコンサート」に向けて 2~6頁
- 被災地の社会的養育の、今と、これから 7頁
- 原発事故後の「みんなのきろく」 8~10頁
- 被災後の地域を、自分たちで作り出す：
気仙沼市水梨地区の障がい児支援事業の展開 11~13頁
- 「カリタス石巻ベース」との協働 14~15頁
- 献金感謝・会計報告 16~17頁
- 巻末言 10年・被災地の友情 18頁



完成間近の「石巻南浜津波復興祈念公園」と「石巻かわみなと大橋」

「地域」と「復興」

ワイズメンズクラブとの協働から

「復旧」と「復興」

東北ヘルプは、この10年間、「復興」という言葉の意味を現場で考え続けてきました。最初に痛感したことは、「復旧」と「復興」とは「全く違う」ということでした。

例えば津波被災地に立って、「この場所を元に戻したい」というのは、自然な人情だと思います。でも、例えば「津波災害特別警戒区域」と行政から指定された場所や、あるいは原発事故のために「避難区域」とされた場所を「元に戻そう」とすれば、そこにはやは

り、無理が生まれます。また、「元」に戻したとしても、そこには（それこそ元通りに）少子高齢過疎の現実が広がることとなります。

「復興」と「復旧」は、違う。そこに新しい何かが生まれなければ「復興」にはならない。でも、「復興」するためには、「復旧」以上にたくさんのエネルギーが必要となります。それを、どうやって手に入れればよいのか。現場で私たちは考え続けました。

「桃太郎主義」と「新住民」

そうした中で、一つの言葉が耳に残りました。「桃太郎主義」という言葉です。

「日本列島改造」という標語が語られた頃、今から半世紀ほど前のことだそうです。「鬼が島」に宝を獲りに行く桃太郎よろしく、地方から中央へ出て行って、公共事業の予算を取って、帰ってくる。「その後の事」も「自分たちの地域以外の事」も、まずは当面、まったく、考えない——そういうあり方を批判して語られたのが「桃太郎主義」という言葉だったそうです。「復興」のためのエネルギーを「どこか遠く」から取ってこようとすれば、そこには「桃太郎主義」という批判がまた、聞こえてくるのではないかということです。

では、「復興」のエネルギーはどこから得ればよいのでしょうか。一つの可能性は、「新住民」にあると思います。2011年以来、被災地を思う強い気持ちに押し出されて、多くの人が東北各地にやってきました。その人々の多くは、そのまま定住してくださいました。被害があまりにも大きかったからです。そうした「よそもの」のみなさまが、新しいエネルギーを被災地にもたらしてくださいました。

でも今、「新住民」と「旧住民」の間のすれ違いが目立ってきています。何かが、それをつながなければならぬと、現場で感じています。

YMCA/ワイズメンズクラブや教会の役割

「新住民」と「旧住民」をつなぐものは何か。私は二つのことを考えます。それは「100年前の新住民」と「地域の歴史」です。

一つは、「100年前の新住民」です。例えばYMCAやその後援団体である「ワイズメンズクラブ」は、100年ほど前に、遠く海外からやってきて、地道に地域に根付いてきました。あるいはキリスト教会もそうです。そうした団体のスタッフは、次々と交代しながら、各地の古いものと新しいものをつないできました。

そうしてつなぐ作業が続きますと、そこには「歴史」が立ち上がってきます。「歴史」は「過去」とは違います。「過去」を丁寧に辿らないと「歴史」になりません（「歴史=history」という言葉は、もともと、「猟師が獣の足跡をたどる」というギリシア語から生まれたそうです）。過去を丁寧に辿ることで歴史が生まれる。その歴史が「新住民」と「旧住民」を緩やかにつなぐ。そんな可能性を感じています。

東北ヘルプは、今、「100年前の新住民」である日本基督教団石巻栄光教会や仙台YMCA/石巻広域ワイズメンズクラブとの協働を深めています。そうしてそこから、「被災体験の伝承」のための「文庫活動」

を行い、東北キリシタン研究に協力し、サンファン号の保存運動に参加しています。

さらに、そうした活動資金を確保しつつ、加えて被災地域の地場産業の復興にも寄与しようと、私たちは協力して「3.11メモリアル」のプロジェクトを進めています。今回もまた、パンフレットをお入れしました。ご購入いただきますと、①購入代金の2割が被災地支援事業に用いられ、②購入の過程で被災地の地場産業を担われる方々と皆様とのつながりが生まれる、という仕組みです。ご検討を賜れば誠に幸いに存じます。



「愛と希望のコンサート」に向けて

「10周年」の時を大切に過ごそうと、「2011年3月11日」の記念行事を「宮城南三陸 3.11 東日本大震災追悼記念会」実行委員会の皆様が、「東北応援団 LOVE EAST」の皆様と一緒に組み立ててくれました。その企画は「愛と希望のコンサート」と名付けられました。しかしその準備の最初から、この感染症拡大の騒ぎとなりました。その中で、一年間たくさんの議論と工夫を重ねられまして、「愛と希望のコンサート」は「オンライン」での催事となったのです。今回、この催事に参加される四人のアーティストの方々に、2011年3月からの「10年」を振り返っていただきながら、お話を伺いました。以下にまとめてみましたので、ぜひ、ご高覧ください。

(2021年2月20日 東北ヘルプ事務局長 記)

中澤竜生さん（宮城南三陸 3.11 東日本大震災追悼記念会 実行委員長）：

「宮城南三陸 3.11 東日本大震災追悼記念会」の活動は、2012年から始まりました。

岩渕まことさん（東北応援団 LOVE EAST 理事長）とは、2013年に星野富弘さんの絵画展を津波被災地で開催したとき、ご一緒いたしました。

そしてその二つがつながって、今年、タイアップさせていただくこととなったのです。

——「宮城南三陸 3.11 東日本大震災追悼記念会」は、宮城県北部の津波被災地の現場で活動する皆さんで組織されていますね。そこからの要請を受けて「東北応援団 LOVE EAST」が協力してくださったわけですが、この「東北応援団 LOVE EAST」という団体は、どんな団体なのでしょうか。

東日本大震災追悼特別番組

愛と希望のコンサート

3.11を忘れない

～10年目から未来へ～

スティーブ・サククス
岩渕まこと・由美子
井上とも子
萩原ゆたか

この日、「愛と希望」を奏でる音楽とともに追悼のひとつときを。
繋がり合い、励まし、支え合いながら歩めるように。

久米小百合さん（東北応援団 LOVE EAST 副理事長）：

2011年3月11日のことを思い出します。息子は中学一年生でした。学校はお休みでした。お昼過ぎの2時45分ころ、東京でも、揺れたのです。大変な地震だと思いました。福島原発事故も、映像で見ることができました。テレビで見ただけでいいのか、何もできない、どうしたらいいのか・・・と悩みながら、4、5日、過ごしていたのを思い出

します。次第にユニセフなど、募金先もわかってきました。でも、それだけでいいのかと、戸惑いと迷いがあった、何かできることはないだろうか、と考えて、あちこちに電話をかけ始めたのです。特にその時、東北出身の岩渕さんにお電話したことが、「東北応援団 LOVE EAST」の結成につながっているのだと思います。

岩渕まことさん：

そもそも、久米さんとは長い付き合いでした。私も、震災の時、茫然自失していたのですが、お電話をいただき、はっとして、このままではいけないと

思い、すぐに、一緒に何かをし始めた。そんな感じだったと思います。

——仙台出身の岩渕さんは「東北人」という自覚をお持ちですね。

岩渕まことさん：

はい。でも、自分が東北人であるという自覚は、まさに久米さんと話をしている中で、はっきりとさせられたものでした。

そして、久米さんや岩渕由美子さんたちと一緒に立ち上げたのが「東北応援団 LOVE EAST」でした。そのホームページには、この団体の目的が、こう書いてあります。

被災地のキリスト教会・団体を通し、

音楽やアートを通して

復興支援活動をお手伝いさせていただきます。



「東北応援団 LOVE EAST」のホームページ

love-east.com

「東北応援団 LOVE EAST」は支援者を支援する団体です。スタッフは6人です。ボランティアに行くアーティストを経済的に支援してきました。私たちはスタッフとして、とにかくこの10年、夢中になってやっていたように思います。石巻などで活躍する岸浪さんのところで、泥かきをして活動が始まりました。シンガポールとマレーシアでのチャリティコンサートが一つの転機となり、音楽活動での支援が本格化したのでした。今では「音楽で支援する」ということに特化した働きとなりました。

萩原ゆたかさん：

私は茨城県に住んでいます。私もあの震災を受けて、僅かでも何かできないかと探る中、岩渕さんをはじめ、いくつかのつながりをたどりました。2011年6月に、石巻、女川を辿り、南三陸町歌津にて、ガレージで長靴をはいたままミニコンサートをしたことが初めでした。

普段、私自身は、自分から手を挙げて前に出るタイプではないのです。でも、「東北応援団 LOVE EAST」の先生方から、アーティストサポートのお話を聞いた時は、是非、行かせてくださいと自分から手をあげた事を覚えています。今思うと、それは、私が東北に通うために、大きな後押しをして頂くきっかけになったと感じています。「東北応援団 LOVE EAST」の働きである、アーティストサポート（経

費の一部を支援していただく）のおかげで、自費ではとても行けない回数、被災地へ赴くことができ、とても感謝しています。被災地を思って献金して下さる沢山の方々のお陰で、沢山の被災地の皆様にお会いし、お話を聞くことができました。

また、この働きには副産物があります。「東北応援団 LOVE EAST」のサイトに報告する事を通して、アーティストが被災地の皆様とお会いした様子を多くの方にお分かちすることができます。つまり「被災地の方々のためにアーティストを支援する」だけではなく「他地域の方のために、被災地の生の様子をお知らせする」という、双方向のお働きを担っておられるのだと思います

——「10年」が経って、被災地が、東京などの地域から疎遠になり、遠く感じられるようになってきた、かもしれない。そうした中で、「東北応援団 LOVE EAST」の役割が、とても大きなものとなっているということですね。

久米小百合さん：

私にとって、この10年は、あっという間でした。「もう10年なんだ」と感じます。でも、去年から世の中は「コロナ」一色になってしまいました。支援活動も止まっています。歯がゆい思いです。気持ちも止まっているように感じられるのです。

震災から4年間くらいは、メディアも関心を持ってくれました。報道も増えました。でも、この数年

は「東京にオリンピックが来る」といった中でしか、被災地は報道されなくなったように思われます。それで、東京にいと、被災地の様子が見えなくなりました。東京では「教会で被災地のために祈る」ということも「教会で被災地の報告を聞きましよう」ということも、ほとんどなくなってしまいました。悲しい気持ちがしています。

——風化が進んでいるところに「コロナ」の騒動が覆いかぶさった、という感じでしょうか。

岩淵まことさん：「東北応援団 LOVE EAST」としても「10年間」を意識して活動の目標を立てて進んできたのですが、コロナになって、本当に、動きが取れなくなりました。たとえば、釜石で、演歌を中心に次へつながるフェスを考えていたのです。「ありがと音頭」が、釜石の皆さんに深く届く歌だとわかりましたから、ぜひ、そのフェスをしようと考えていました。「ありがとうの集い」を計画していたのです。でも、それも、まったく無理、となりました。コロナによって、自分たちの願いがとどめられている、最後の句読点を打てない、中途半端な状態にある。そんな気持ちがしています。

岩淵由美子さん：それでも、釜石には、社会福祉協議会に、クリスチャンボランティアとして支援活動に立ち続けられた高橋和義先生が働いてくださっ

ています。それで、現地とのコミュニケーションが切れずに続いているのです。これは、とても貴重なことだと思っています。

久米小百合さん：震災以来、気仙沼、釜石、石巻と、各地の地元の方々とは話す機会を豊かにいただきました。仮設住宅がなくなって、皆さんと出会う機会もなくなるかと思いましたが、気仙沼の風間さんや嶺岸さん、石巻の関川さん、それから釜石の柳谷さんやカリタスの皆様、など、地元根差したクリスチャンの方々はずっと、地道に地域の方々につながってくださって、接点になり続けてくださいました。そうして今でも、教会を通して、あの懐かしい方々とつながることができています。それは「コロナ」によっても途切れることはなかったのです。

——そうして、困難の中でもあきらめずに、今回のオンラインでの催事の開催となったのですね。

萩原ゆたかさん：

はい。今回、図らずも「コロナ」によってネット配信という形になったことを、とても興味深く思っています。

中澤竜生先生を始めとした教会やNPOの皆様は、被災直後から、被災地の皆様に、まさに寄り添った支援を続けておられます。そして、毎年、この「3・11」の追悼会を通して、被災地の皆様に直接寄り添ってこられました。

特に「10周年」は、何年も前から計画しておられたと聞いています。残念なことに、今年は「コロナ」のため、地元での開催はできません。それでも、何とか気持ちを届けたいとの情熱が、オンラインでの開催に繋がったと聞いています。

しかし、裏を返せば、これは大きな発展かもしれません。ネット配信により、今まで届けられなかった多くの方にもお届け出来る可能性が広がったのです。10年間、地元の方々と共に豊かに育まれたコミュニケーションが、別の形に発展したと言えるかもしれません。

この「10年」を考えるにあたって、自分の手記を読み返しました。2013年から、中澤先生のご紹介で、仮設住宅などを訪問させて頂きました。そして10年の時間が経って行きます。毎年、被災地をめぐる状況がどんどん変わり、解決すべき問題も変わり、被災地の方々には目まぐるしい10年であったことが記録されていました。

そして、支援される皆様も問題解決のために目まぐるしく努力されていました。状況が変わっても、その都度、努力が積み重ねられ、少しずつ違うステージへと進んで行かれました。そして今、「コロナ禍」にあって、人と人とが直接出会うことが難しくなりましたが、これもまた「次への一歩」なのかもしれません。

愛と希望のコンサート 2021

Youtube オンライン放送予定スケジュール

2021年3月11日(木曜日)は

東北被災地より、以下の通り

ライブ放送を行います。

出演：中澤竜生、久米小百合、デイビッド風間

①午前10時～11時：南三陸ホテル観洋にて

②午後2時～3時：気仙沼第一聖書バプテスト教会にて

③午後3時～YouTubeチャンネルにて

「愛と希望のコンサート 2021」公開開始

(90分番組・公開は4月10日まで視聴可能)

Youtube チャンネルはこちら：

UCsyV2w6n0ao026lYzF5FayA



——この「10年」を越えて、被災地はその先へ進まなければなりません。そこに「復興」という言葉が、大きく浮かび上がってきます。この言葉は、とても使いにくい言葉だと、現場で思われています。

久米小百合さん：「復興」という言葉は、確かに、難しい言葉だと思います。たとえば住宅についても「たくさんできた」と聞いて現地に行くと「そうでもなかった」ということを見してきました。地域によっても違いがある。盛り土をしているところが多いが、上に何も建っていない、ということをおちこちに見て、大変なのかな、と出てきました。

岩淵まことさん：釜石で「復興」の経過を見聞きして感じ、印象に残っていることをお話しさせてください。避難所で生活をして、そしてやっと、仮設住宅に入った、それがまた終わって、復興住宅にたどり着いた。インフラとしては、それで終わり、となる。でも、そこで、また孤独と不安に行き着くのではないのでしょうか。最初と同じものが、最後にまた、残るといことです。インフラが整備されることで、一通りのことが「終わった」と言われるのでしょう。でも、やっぱり、暮らしがどうなるか、人に寄り添うことがどうなるか、どうすればいいのか。そういうことが、インフラ整備を超えて、課題となるのだと思います。

岩淵由美子さん：何をもち「復興」と言うのでしょうか。建物ができて、形が整う。でも、そうして初めて、やっと、心の問題・コミュニティの回復を、正面切って課題にできるようになるのではない

——そうした中で、まもなく「愛と希望のコンサート」が配信されるのですね。

萩原ゆたかさん：はい。「愛と希望のコンサート」は、数ヶ月をかけて収録、編集されてきました。いよいよ、この「3・11」に、被災地はもとより、世界に向けて配信されます。

岩淵まことさん：配信は、録画したものが1時半くらい、準備できました。それをういながら、久米さんが、当日現地でレポートすることになっています。移動しながら、生配信をする形式です。つまり、録画と生配信の二つの形で、ハイブリッドで行きます。

萩原ゆたかさん：人に言えない辛い思いをし、たくさんものを失い、今を過ごしておられる方々がおられる事と思います。コンサートを通して、ほんの少しでも気持ちの和む時間になればと思います。

この10年で、新しい生活に歩み出すことができた方も多いでしょう。でも、そうできない方々もおられるでしょう。孤独死や引きこもりもあると聞きます。環境を簡単に変えることができない方もたく

でしょうか。仮設住宅に暮らしている時期が長かったのが、東日本大震災の被災者の皆さんです。その長い時期が終わり、今、お一人お一人に、新しいコミュニティが必要となっています。そこが難しいところです。たとえば高橋和義先生は、そうした中、釜石で、復興住宅ごとに自治体を立ち上げて行くという社会福祉協議会の働きを担当しておられます。私たちは、その集会所に行って「部屋に引きこもってしまった」と心配されている人たちの出合いのきっかけを作ることができるのです。具体的には、集会場のミニコンサートをして、お隣同士が初めて出会う、ということが起こる。そこに人間関係の回復がある。そうしたことが、今、とても大事だと思うのです。

何年か前のことを思い出します。明るい感じの人が、お茶を飲みながら、お話しくださったのです。その方は、あの時、津波に流された。水に沈んだ中で、とにかく掴まるものがあって、それでどうにか水の上に出て、息ができた。そんな体験を、語ってくださいました。普通にお茶を飲んでいる、ごく当たり前の雰囲気の方が、過酷な経験をして、深く傷つかれたのだ。初めて、そう気づいたことでした。被災した方々は、本当に大きな傷を負われているのです。その心を思います。そこに、復興の大きなポイントがあると思うのです。

さんおられるのではないのでしょうか。

そんな中におられる皆様に「あなたのことを思っている人がいる」とお伝えしたい。クリスチャンとして「神様が皆さんを大事に思っている」とお伝えしたい。「幸せになってほしいと、神様がそう願っています」とお伝えしたい。ほんの少しでも「キリストの香り」を放ち「地の塩」になれたらと願っています。

久米小百合さん：今回のタイトルである「愛と希望のコンサート」には、とても大切なメッセージが込められていると思います。これは気仙沼の風間さんがおっしゃったことですが、「10周年なので、慰霊の気持ちをささげる。けれども、それで終わらないようにしたい」ということです。つまり「愛と希望、ということ掲げて、この先、ということ、この先の10年・20年に目を向けることが大切だ」ということです。

都内、海外と、場所にかかわらず、見てくださった方が、一人ずつ、一人の人と、つながるツールに、

このコンサートがなればと願います。ご自分の福音宣教に用いていただく、というイメージです。大勢でなくてもいいのです。「ひとりずつ」つながっていきたい。そう思っています。そういう意味で、配信を見てくださったその「一人」「一人」が、各自お持ちのつながりの中で、このコンサートが用いられたら嬉しいのです。具体的に言いますと、確かに、年齢的に、70代以上の方はネットにつながりにくいでしょう。でも逆に、この機会に、家族や仲間から、お一人ずつ、つないでくださればと思うのです。

岩渕由美子さん：音楽は、特別なものだと思います。言葉で届くものと、音楽で届くものでは、受け取る体の場所が違う気がするのです。「言葉で、意味が伝わる」というのではなく「音で、癒される」

——10年経って、「支援する・される」という断絶した区別は、緩んできていますね。

岩渕まことさん：

はい。「支援する・される」という分断を超えて、今「私たち」という不思議なつながりと意識が、新しく立ち上がっていると思います。そして、そうでなければ、「復興」なんて、机上の空論となるのだと思います。

そして今考えるのは、東北にボランティアで支援に行ったアーティストの方たちが、職を失って、大変な状態にある、ということです。このコロナになって、アーティストを支える、カルチャーを支える、ということの大切さを、切実に感じています。

大切なことだと思うのですが、「アーティストは支援を求めている」のです。「助けて」なんて、言えない。誰にも言えない。それはまさに、東北の被災地も、同じだったと思います。「必要だから来てくれ」と、東北の人は、言わないのです。「私は大丈夫だ」と言う。「もっと苦しい人もいる」と、我慢する。だから、手を伸ばす人たちが必要でした。

振り返って考えてみます。震災を通して、文化も壊れました。その中で「文化を守る」ということを意識するようになりました。私たちは、文化を守る活動を、音楽を通して進める。それが、この10年間の支援活動の展開として、あり得ることだと思うのです。私たちは今、そう考えて「アリシアの森」という活動を始めました。文化を支えあうプラットフォームを作ろうという試みです。被災地への支援活動があったから、ここまで来たのだと思います。つまり、被災地の支援の中には、そのための学びと出会いがあったのでした。

ということがあると思うのです。「何かが溶かされる」という感じです。音楽が果たしてくれたことは、大きい。そう思います。

今回のコンサートでも「音楽を通して癒される」ということを、私は期待しています。すごく悲し出来事ではあったけれど、この出来事の中で、出会いがあった。その方々とのつながりをこれからも大切にしていきたい。そんな風に思っています。

私はどうしても、やっぱり、「ありがと音頭」のフェスを、被災地で実現したいと思っています。「支援する側・される側」と切り分けられるのではなく、出会いに「ありがと」という集いができたらと、そう期待しています。「忘れないよ」と、「寄り添う思いがあるよ」と、そう確認しあいたいのです。

「コロナ」は、全世界が向き合っている大きな課題です。自分のような、支援活動に携わる者にとってみますと、「東北の頑張り」が、教えになっているのです。それにもっと学びたい。そう思いながら「アリシアの森」を始めています。うめくような思いが、そこにあるのです。それは東北から生まれたものです。

(了)



「クリスチャンカルチャーの振興をめざして、クリスチャンアーティスト・クリエイターたちとその仲間たちが開拓するコミュニティサイト」として設立された「アリシアの森」のホームページ。

「真理はあなたがたを自由にします」という新約聖書から
ギリシャ語の αληθεια (真理) に注目して
「アリシア」と名付けられました。

<https://www.arisia.tokyo/>

被災地の社会的養育の、今と、これから

「こどもの夢ネットワーク」の藤田毅さんインタビュー

2018年夏号のニュースレターで「被災後の日常と子どもたち2:『どうせ』と言わずに夢をもって」と題して、「こどもの夢ネットワーク」の代表であるト藏康行さんのお話を伺いました。その後、皆様からの献金をお預かりしましたから、2021年2月15日、東北ヘルプ事務局長が「こどもの夢ネットワーク」をおたずねし、またお話を伺いました。



「コロナ」の騒動は、やはり、困難な中を生きる子どもたちの「その後」に深い影響を残していました。そして「こどもの夢ネットワーク」としても、新しい取り組みを積み重ねて、支援の網の目を細かくし、さらに行き届いた体制を整えようと、努力を続けておられました。



被災後の日常に、このパンデミックがのしかかる、その中を支援者がどのように進んでおられるのか。今回は「こどもの夢ネットワーク」の藤田毅さん（左の写真の方です）にお話を伺いました。

(2021年2月22日 東北ヘルプ事務局長 記)

——「こどもの夢ネットワーク」について、改めて教えてください。

2009年から始まりました。「里親里子」「児童養護施設」「行政」といった違いを超えて、「社会的養育」の子供たちのより良い育ちと自立を目指して、みんなで一緒に考えて行くためのネットワークです。

——社会で子育てをする「社会的養育」のために、立場を超えて協力する体制をおつくりになったのですね。

はい。そして私たちは、活動の中核として「^{ゆめっぽ}夢歩」という施設をおいています。児童養護施設や里親のもとから社会に出た後、皆さん「気軽に訪れる場所」が欲しいと願っていることがわかりました。それで2015年から一軒の建物を活用し、「居場所」を作る努力をボランティアで展開してきました。今、コロナの影響で活動を縮小し、週2回（水曜日と日曜日）開所しています。いつも来てくれる人がいます。また支援者の立場で相談に来てくださる方もいます。

——この「コロナ」の中で、お困りになった人も多いでしょうね。

はい。特に飲食業に就いた方々が打撃を受けています。正職員でない場合が多く、時給で働く立場ですから、収入が激減したという声をたくさん聴きます。生活困窮の中で仕事探しも難しくなります。

——支援体制を整える必要がありますね。

そうです。宮城県には自立支援の団体が、私たちが

含めて三つあります。その連携を急いでいます。また、住まいを失った人のために、住居を用意しましたが、残念ながら引き払いました。「家賃の2/3」を本人が払い、残りは「桑チョコ」の販売などを通して支援したのですが、専属の支援員がいないので行き届かないところもあり、今その支援は休止しています。ボランティアの力をつないで、できることを探しながら、この難しい時を過ごしています。

——「桑チョコ」の販売で活動費を作ってきたのですかね。

そうなのですが、去年は難しい時を過ごしました。日本ハビタット協会様との連携で、昨年までに販売活動は軌道に乗っていたのですが、2020年は感染症拡大を受けて、活動が止まってしまったのです。でも今、もう一度始められないか、考えています。

——これからの展望を教えてください。

ネットワークが立ち上がってから10年が経ちました。社会的養育は国の方針となりましたから、里親委託は増えています。ですから、新しい児童養護施設の役割分担として、里親さんたちの支援を手厚くしつつあります。そのように社会的養育は手厚くなりました。それでも支援から漏れる子供たちがいます。そこに自分たちボランティアの役割を見出しています。まず宮城県内三団体で連携を強めながら、支援を継続する体制を立て直そうと思います。ネットワークを緩やかにつなげて広げて行きたいと思います。(了)

原発事故後の「みんなのきろく」



「東北ヘルプニュースレター」2020年イースター号で、「かたつむりの会」の嶋原敦子さんのインタビューをご紹介しました。その後、嶋原さんとそのお仲間のみなさまが記録集『3・11 みんなのきろく みやぎのきろく』を発刊されました。福島第一原発事故を受けて、宮城県内で立ち上がった多くの方々の、貴重な活動が広く収集され、整理されて残されたのです。2021年2月の大地震を受けて、福島第一原発事故現場では、いくつもの不安な事象が起っています。原発事故は確かに今まだ進行中ですが、でも、もう多くの人の意識の中では「過去のこと」になりかけている。そうした中で発刊された貴重な記録集について、嶋原さんに、オンラインで語っていただきましたものを、以下にまとめました。是非、ご覧下さい。

(2021年2月23日 事務局長 記)

——裏表紙には、不思議な物が写っていますね

編集委員のおひとりに、山中環さんという方がいます。宮城県南部にある角田市の芸術家で石を彫っておられます。「放射能から命を守る宮城県南部の会」サイトの管理人をしてくださっています。表紙のタイトルの揮毫もこの山中さんです。こうした一般市民の一人お一人が、震災後すぐに動き出してくださったのがこの記録集「みんなのきろく みやぎのきろく」でした。

——この記録集を残そうとお考えになったのはなぜでしょうか。

2017年頃に、記録を残さねばと、私は考えました。宮城県では「心配ない」とばかり言われて、原発事故後6年が経った頃には汚染物質（稲わらなど）の焼却問題が出てきました。「焼却してしまう」という動きを見て「問題が見えなくされて行く」と感じたのです。ちょうどそのころ、「自主避難者」と呼ばれた避難中のみなさまへの住宅支援が終了となり、みなさん、原発事故汚染地域へ戻るのかどうか、悩んでおられました。そうした中で「10年で清算されてしまう」という流れを感じました。そうした流れの中で、私たちの「きちんと調べて欲しい」という活動もあったのです。その活動には、成果が出たこともありましたが、出なかったこともありました。そうした私たちの記録を残そうと思ったのです。それが1番の動機だったと思います。

——その思いに賛同された方々が、編集委員を担われたのですね。

はい。県南で活動してきた仲間が、多く、協力してくれました。2019年に高木仁三郎市民科学基金から資金を得ることもできました。聞き取りや収集は私が担当してたたき台を作成し、編集メンバーで編集会



議を重ねて2020年11月に完成したのです。今、この記録集を一人でも多くの人に見ていただけるように工夫しています。

——どうしたら手に入れることができますか？

「市民の記録」編集委員会 (miyaginokiroku@gmail.com) にご連絡いただければ幸いです。一部 800 円です。500 部印刷しましたが、もうすぐ無くなりそうです。増刷をするための資金の獲得が、今の課題です。500 部の増刷のためには約 35 万円かかります。「一部 800 円」

ですと、気楽にお手に取っていただけますが、実は、完売しても「増刷には足りない」という現実があります。今のところ、宮城県外の方が関心を寄せてくださり、手に取ってくださいます。県内への浸透が課題だと思っています。女川原発の再稼働問題もあるのです。

——記録集を作成する過程で気づいたことは、どんなことでしょうか

本当に、知らないことが多いのだ、ということに気づかされました。原発事故を受けて、たくさんの活動が、宮城県でも、各地で起こりました。そうしたことは新聞で知っているつもりでした。でも、実際、記録集を作るために、当事者各位にお会いして資料を見せ

ていただくと、驚かされることが多くありました。「自分たちだけではなかった」と励まされることも多くありました。私たちのネットワークは宮城県南部に限定されていましたが、それが全県に広がりました。

——たくさんの団体の、たくさんの活動。それは今、どうなっているのでしょうか。

今でも学習会を続けているところもありますが、活動休止となった団体もあります。でも、休止しているところとも、今回の編集作業を通して、つながりが残りました。どの団体の方々も、みなさん、大切に資料

を取っておられました。それを一緒に見て、たくさんのかを一緒に再確認できたことは、とても印象深い思い出になりました。

——活動の一覧(次ページを参照)などを見ても、宮城の県南と県北で、ずいぶん違いがあるように思いました。

福島県に近い宮城県南部は、やはり、事故当初から、危機感が強かったように思います。実際には2011年7月20日に「航空機モニタリング調査」の結果が国から出て、宮城県北部も広範囲に深刻に汚染されていたことがわかりました。そのことが周知されてから、県内全域での様々な動きが始まったのだと思います。県南は「お母さん」たちが中心になって子どもたちを

守ろうと必死で動いていました。北部では「稲わら」の汚染が大問題となり、行政と市民が一緒に議論して大きな動きとなって行きました。また注目すべきこととして、県北では「保健室の先生」が力強く頑張られました。私たちの課題としては、県北の「お母さん」たちの声を、まだ十分に聴けていないことがあります。その思いを知りたいと思うのです。

——私は県北に住んでいます。県北では、「女川原発反対運動」の流れの中で、今でも原発問題が議論されているように思います。県南には「普通」の人々によって、つまり「社会運動」ではなく「自衛する当事者」の課題として、2011年以降、活動が進んできたことを思います。県北と県南とが補完し合うことができたなら、本当に力強いと思いました。

そのように記録集を読んでいただけて、うれしく思います。この記録を資料として、報告会などを行い、たくさんのお声を聴きたく思っています。記録集の出版がきっかけとなって原稿の依頼もいただきました。これからは発信をし続けたい。そうして「当事者」が声を上げるきっかけになれば、と、願っているのです。私は「環境問題」を専門とする研究者でもあります。海外の事例から「国益」や「国策」の問題を意識してきました。原発事故を受けて、市民・母親として、身近な問題として、原発問題と関わるようになりました。私も「社会運動」としてやっている自覚はあまりないように思います。私のような人は多いかもしれません。「脱原発」を掲げると、離れて行く人がいる、ということも周囲に見てきました。むしろ「子どもを守りたい」という意識が強いのです。まずそこでつながっているように思います。それなのに「安全・安心」を発

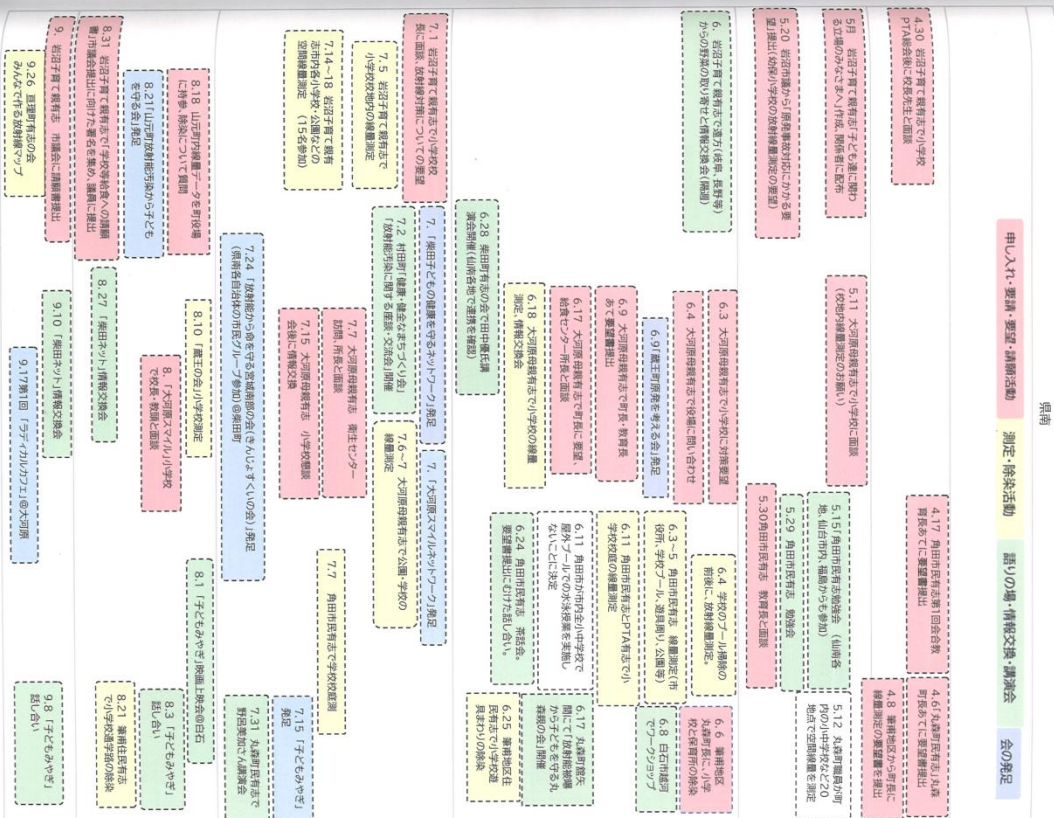
信する加害者側が、「不安をあおるな」とか「神経質になりすぎるな」といった言葉で、そうした思いを「クーリングダウン」していこうとします。でも、それはおかしいと思います。だから、場所を作りたいのです。声を上げる場所があれば、声は発せられていくはずで「発信できる」という安心感をつくりたいのです。そこで経験が共有されていくと思うのです。被害者の声を自制する必要のない社会。子どもの未来を守るために、自分たちの社会のこれからを、みんなで一緒に考え、自分たちで決めていける社会。自分で考える一人一人が「アメーバ」のようにつながりあう、そんなところに、社会を変える方向性があると思っています。「一致団結」というより「普通の人たちがつながり合う」。そうして、原発に頼らない、安心して子どもを育てられる社会に、みんなでこの社会をよりよく、生きやすく変えていけると思っているのです。(了)

第1期：各地での市民の動き

以下の年表は、ここまで見てきた各地の市民グループの主な活動の経緯を地域ごとに時系列に整理したものです。県南では、4月から、県北では7月以降、同時期にいくつもの市民グループが動き出した様子が見えます。それらがやがて2012年2月の35

県北		仙台
2011年	3月	3.12 東郷町運動会発射装置 3.14 仙台市・栗原市7地区での発射装置開始 3.25 水廻水、蔵生館などの発射開始
	4月	4.5 栗原市地点(赤崎町、角田市、七ヶ宿町)での空間放射線量測定開始
5月	5.2 栗原郡13市町に簡易型放射線測定器を貸与 5.24 栗原市測定方法変更	4月「5年経過後」発定 5.17「5年経過後」栗山自治市長に意見書提出、岩手県、宮城県に意見書提出 6.1「5年経過後」女性議員と被災地復興NO.2の意見書提出 6.11「5年経過後」10年経過後に出発者各報告会開催 6.16「5年経過後」10年経過後、仙台市長へ「子どもが安心して暮らせるまちづくり」に関する意見書提出 6.17「5年経過後」10年経過後、仙台市長へ「子どもが安心して暮らせるまちづくり」に関する意見書提出 6.22「5年経過後」10年経過後、つなごうプロジェクトメンバーによる「つなごうプロジェクト」に関する意見書提出 6.28～県内以外の市町村に簡易型放射線測定器を貸与(個別通知)
	6月	6.4～9/10/11にて、県内各市町村への簡易型放射線測定器に向けて取組中であり、みなさんによる貸付も進んでいます。「プロジェクト」に関する意見書提出(回答者77名) 6.4～12/10/11にて、仙台市内の小・中学校のグループ活動についてのアンケート(回答者77名) 6.15～17「つなごうプロジェクト」発起人(メンバー)20名 6.15～17「つなごうプロジェクト」発起人(メンバー)20名 6.17「5年経過後」10年経過後、仙台市長へ「子どもが安心して暮らせるまちづくり」に関する意見書提出 6.22「5年経過後」10年経過後、つなごうプロジェクトメンバーによる「つなごうプロジェクト」に関する意見書提出
7月	7.11 全市町村における空間線量率の定点測定を開始	7.8「5年経過後」10年経過後、仙台市長へ「子どもが安心して暮らせるまちづくり」に関する意見書提出 7.11 仙台市長への意見書提出 7.11「5年経過後」10年経過後、仙台市長へ「子どもが安心して暮らせるまちづくり」に関する意見書提出 7.31「5年経過後」10年経過後、仙台市長へ「子どもが安心して暮らせるまちづくり」に関する意見書提出
	7.28 センガリ感染された牛の出荷制限指示	8.4「5年経過後」10年経過後、仙台市長へ「子どもが安心して暮らせるまちづくり」に関する意見書提出
8月	8.19 牛の出荷制限の一部解除指示	8.31「5年経過後」10年経過後、仙台市長へ「子どもが安心して暮らせるまちづくり」に関する意見書提出 9.6 仙台市長へ関係者へ「意見書」提出
9月	9.28 放射能情報サイトみやぎ開設、サイトでの空間線量公示に切り替え	9.1「5年経過後」10年経過後、仙台市長へ「子どもが安心して暮らせるまちづくり」に関する意見書提出 9.6 仙台市長へ関係者へ「意見書」提出

団体による請願提出、その後6月の9/2日団体の請願提出を経て、2012年7月には子どもたちと妊産婦を放射能から守るための体制の確立を求める請願書の採択へと結びつきました。その頃は、ようやく汚染状況重点調査地域での除染が始まる頃でした。



『みんなのきろく みやぎのきろく』 58-59 ページ。
宮城県全域の「市民の動き」が「県北」「仙台」「県南」に分けられて
時系列にそって一望俯瞰できるように整理されている。



いっぽ通信 No.31

多機能型事業所いっぽ

メール mizunashicaffe_ippo@ab.auone-net.jp

もういっぽ

2020年12月26日(土) 発行

988-0164 気仙沼市赤岩四十二80-28

TEL0226-37-4585 FAX37-4925

URL http://www.mizunashi-ippo.com/



12月18日に気仙沼市議会において、「旧水梨小学校の校舎をNPO法人水梨かふえに貸与する案件」が可決され、正式に旧水梨小学校の校舎を多目的事業所いっぽの施設として利用することができるようになりました。これまでの経緯をお知らせします。

被災後の地域を、自分たちで作り出す

気仙沼市水梨地区の障がい児支援事業の展開



震災後の気仙沼市本吉で、震災前にはなかった新しい動きが始まりました。「障がい児」への支援のための福祉事業所を新しく作り上げ、「小さくされてきた人々」を中心として、新しい「被災後の地域」を作り出そう、という動きでした。全国からの支援に支えられ、その動きは「特定非営利活動法人セミナーレ」として結実し、今日も展開しています。

「東北ヘルプ ニュースレター」2019年夏号でもお知らせしました通り、この「セミナーレ」からノウハウを学び、市内の別地域（気仙沼市水梨）に新たな福祉事業所「いっぽ」を建ててくださった方がいました。秋山順子さんとおしゃいます。その活動は今、新しい展開を示そうとしています。2021年2月に、2019年の夏と同様、東北ヘルプの秋山善久理事と共に気仙沼を訪ね、お話を伺いました。

地域を、自分たちで作り出すということ。そこにきっと「復興」ということも見えてくる。そんなお話が伺えました。どうぞ、ご高覧下さい。

(2021年2月23日 東北ヘルプ事務局長 記)

—— 医療的ケアを必要とする障がい児のための施設が必要だと、納屋から始まったのが「放課後等デイサービス いっぽ」でした。今回、小学校の廃校舎を活用することになりましたね。



右が秋山善久理事、左が秋山順子さん。みなさまからお預かりした募金をお渡ししました。



「いっぽ」の活動は、この納屋から始まりました。

秋山順子さん：はい。自宅納屋から始まった活動でした。そして今、30人以上の子どもたちが旧水梨小学校舎を利用する福祉事業所となりました。本当に不思議に思います。この水梨小学校は、2018年度の生徒数が全部で16人だったのです。それで2019年3月末で廃校となりました。私たちは「地元のコミュニティーが壊れる」と、廃校に強く反対したのです。

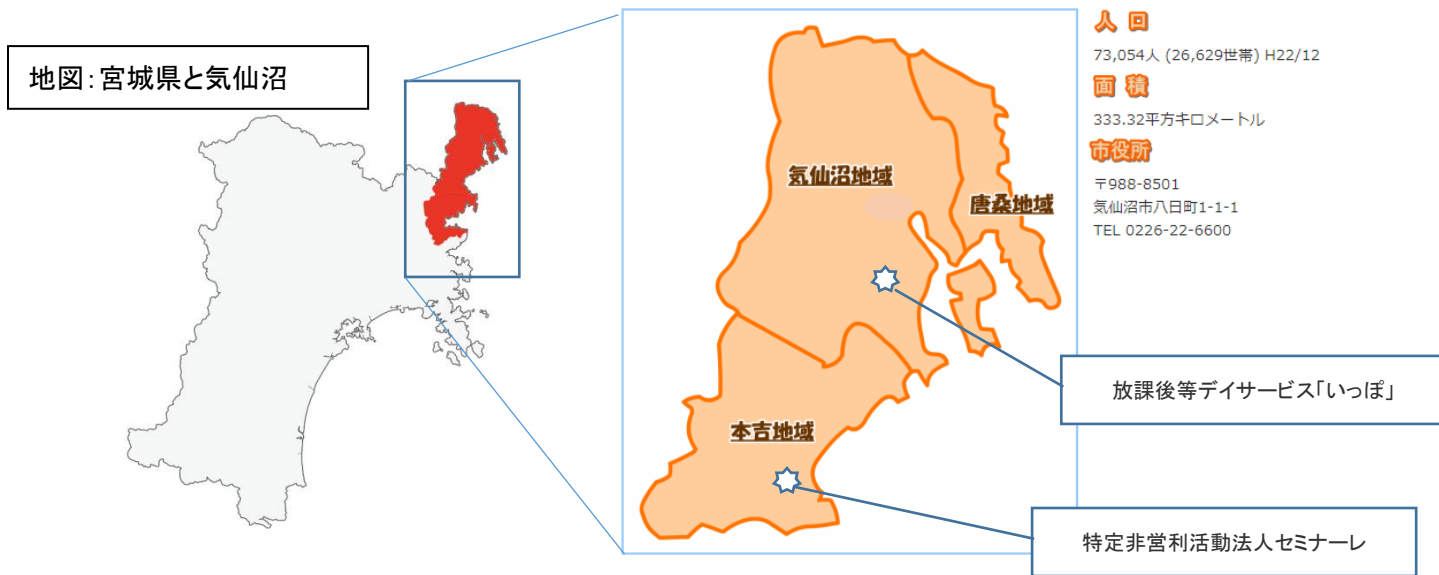
秋山善久理事：私も以前、小学校のPTA会長をやってみて、よくわかったことです。確かに、小学校が地域コミュニティーの核となります。たとえば、この小学校は昔「水梨」という場所にあり、その場所はここから少し離れたところだったのです。でもここに小学校が移る前から今も、この周辺の5地区をまとめて「水梨地区」と呼んでいます。それくらい、小学校は、地域の核となる象徴的な施設なのです。

秋山順子さん：私もそう思って、廃校後に残される大きな負の影響を訴えていました。でも、津波被害への対応がひと段落して、いよいよ、少子高齢過疎の現実が圧倒してきました。その話し合いの中で、一つの出来事が忘れられないのです。地域の人ばかりが50人も集まった日、高齢の男性が、地域の未来に絶望した言葉を発しました。「こんな地域ではなかったはずだ」と、その時、思ったのです。高齢者や子どもを対象に地域活動をしてきた女性たちも、同じ思いを胸に抱いたようです。「私の嫁いできたこの場所・この地域は、もっと素晴らしい場所だったはずだ」と、私はそう思いました。そういう思いが共有されていました。学校の先生たちの中にも、同じ思いを持ってくださった方がおられました。そうしてチームが生まれ、今の事業

所が生まれたのです。非常勤を含めると20人の職員が今、一緒に働いてくれています。

秋山善久理事：同じ気仙沼市の南にある本吉地域での「セミナーレ」の立ち上げにも、私たちはかかわりました。その際、そこが復興のモデルケースとなればと思いました。その核は、地域とのつながりと人々の循環です。「復興」とよく言われますが、それは「前と違う何か」を作り出していく先にだけ、あるのではないかと思うのです。今、地域とのつながりから、ここに新しい動きが生まれ、廃校になる前の二倍以上の子どもたちが、この校舎に集っているのですね。

秋山順子さん：「セミナーレ」こそ、私たちの「お手本」でした。具体的にそこに学び、今があります。



秋山善久理事：「セミナーレ」の中で課題になったのは、個室と共に「広いスペース」を確保することでした。とりわけ精神障がいと共に生きる子どもたちには、広い場所が必要なのです。校舎を使える、校庭も使える、ということは、本当にすごいと思います。

秋山順子さん：はい。でも、教育施設と福祉施設では、防火などの施設の基準が全く違います。それで大規模な改修工事が必要となり、今、資金繰りに苦労をしています。



秋山善久理事：何とかその壁を乗り越えて、10年前に大きな津波被害を受けた気仙沼が、また新しい元気を取り戻せたらうれしいです。

秋山順子さん：それから、看護師資格を持ったスタッフが、もう少しあれば、と願っています。気仙沼はとても良いところです。今、全国にお住いの看護師の方で、こちらに移住して下さる可能性がありましたら、ご連絡を頂ければ本当に幸いです。

広い校舎。この板張りの壁をすべて、防火のために改修しなければなりません。

秋山順子さん：私たちは、子どもたちも保護者も一緒に「ほっ」とする場所を作りたいと思っています。私が夢を持つことが、大切ではないかと思うのです。そうして長く勤めてもらえる場所、楽しい場所を作り出す。そのためのサイクルを、地域と一緒に作っていきたいと思います。そのためには、雰囲気が大事だと思って、今はとにかく、保護者との連絡を密にしています。そうして、質を維持しようと思っているのです。

秋山：「子ども助けてくれない、自分たちは見捨てられた」と、そう思っている親御さんが、たくさんいる。それが障がい児を取り巻く私たちの社会環境です。で

——「この地域に何か良いものがあるから、地域を好きになる」のではなく、

「この地域が好きだから、何か良いものを地域に生み出す」のですね。

秋山順子さん：この事業所を地域の皆さんにご紹介する説明会で、先にお話した「地域に絶望していた人」が、わざわざ私に声をかけ、はっきりと激励してくれました。ここは本当にいいところだと、私は本気でそう思っているのです。それをアピールし続けたい。地域には核が必要です。それを、行政はなかなか、理解できないようです。でも、感染症の中で、これまでの「地域」というものが、どんなに安全を守ってくれるものであるか、みんな、わかったのではないでしょう。

秋山善久理事：「地域」と「福祉」と「復興」とが、一つにつながってきましたね。

秋山順子さん：私は看護師として40年、病院に勤めました。そして「さて、これからどうしよう」と思った時、まずは居場所を作りたいと、地域の皆さんが寄り合えるようなカフェを始めたのが、すべての始まりでした。そこに集まると、みんなが元気になって、楽しくなって、「子どもの声が聞きたい」という声が上がりました。それで、子どもをコミュニティセンターに集めて「はっと汁」を作って食べさせたりする「キッズカフェ」を始めたのです。そうして広がってきた活動の中で、この事業所も出来上がったのです。

利用者児童がみんな楽しくお弁当を食べている、お昼の様子です。少子高齢過疎の中「廃校」となった校舎に以前に倍する元気な声が響きます。



も、この水梨地区では、障がい児のおひとりおひとりが、コミュニティーの核となる小学校舎を復活させてくれました。

秋山順子さん：障がい児への訪問看護とは違って、この施設では、教師や保育士が関わってくださいます。生活に必要な、楽しい、基本的なことを、支援できます。千葉県から去年9月にこの地に転居してきた方がいます。お子さんが肢体不自由児でした。「ここに来れば」とネットで調べて、転居して来られたのでした。今は「ここに来れば笑顔になれる」と、とても喜んでおられます。



お話を伺った部屋の窓の外には、広い校庭が広がっています。

秋山善久理事：まさに「自分たちで」作っていく、という感じですね。この地での挑戦が、一つのよいモデルとなって、被災地から広く発信されることを願っています。

秋山順子さん：ありがとうございます。私たちの活動は、確かに広がりをもってきたのでした。「キッズカフェ」を中心に人が集まってきましたので、学校施設で手作り品や野菜を販売し始めました。実に、地域の女性たちは元気なのです。そうして売り上げが増えていくと、こんどは男性陣が参加してきます。そして今、障がい児者と地域の高齢者が出会い、遊び、友達になり始めました。今はそうした活動が、「コロナ」の中で制限されていることは残念です。でも「さらにこれから」と思っています。感染症の問題を乗り越えた先に、新しい展開を期待しています。

秋山善久理事：そして今、この土地にとって、この場所が、コミュニティーのために、活用されるようになったのですね。それは未来を作るはずです。今日はありがとうございました。

(了)

「カリタス石巻ベース」との協働



「東北ヘルプ」は「仙台キリスト教連合」の支援事業です。仙台キリスト教連合には、キリスト教学校も、YMCA や YWCA も、そしてプロテスタントとカトリックの教会も、参加しています。この度、カトリック仙台教区様から「カリタス石巻ベース」の働きと一緒に進めたいと、ありがたいお話を頂きました。仙台キリスト教連合世話人会はこのお申し出を感謝して受け、2021年から、その働きを東北ヘルプが引き継ぐ方向で、今、準備が進められています。

2021年3月まで「カリタス石巻ベース」の運営を担われてきたのは、濱山麻子さんでした。その尊いお働きを振り返っていただき、東北ヘルプが引き継ぐべきことを、オンラインで語っていただきました。以下、どうぞ、ご高覧下さい。

(2021年2月23日 東北ヘルプ事務局長 記)

——濱山さんがカリタスでお仕事をなさったのは、震災直後からでしたね。

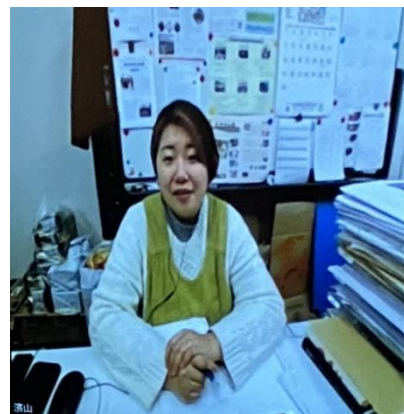
そうですね。2011年5月からです。その時私は、クリスチャンではありませんでしたが、父が教会員で、カリタスのベースの立ち上げにかかわっていました。ちょうど私自身の仕事が3月末で退職という予定でしたが、地震があったので、少し伸びて、ちょうど、カリタスのボランティアが必要とされたとき、体が空いたのでした。そしてボランティアとして関わってから、スタッフとして働いてきました。

——ずっと、仙台のサポートセンターにおられたのですね。

そうです。そして次第に教会のみなさまとのかかわりが深くなり、カトリック元寺小路教会で2017年のイースターに洗礼を受けました。その背後には両親の思いがあったと思いますし、また、被災地支援の働きとして教会に触れたことが大きかったと思います。

——そして、2018年の春から、カリタス石巻ベースの責任者となられたのですね。

はい。役職上は「ベース長」となりまして、週一度、仙台から石巻へ行くようになりました。そのころには佐藤光典（みつり）さんがスタッフとしてベースの2階に住み込んでくださっていました。それから、2017年春までは二人のシスターも、同じ建物の3階の居住スペースにお住まいになっておられました。2017年以降2020年春まで、住み込みのシスターはお一人となりました。全国各地から、様々な修道会の方々が石巻に来て、奉仕して下さったのでした。その繋がりは今でも続いています。私たちのニュースレターを見たりして、お便りを下さいます。そうしたみなさんに、今回、「東北ヘルプ」の皆さんがカリタス石巻ベースの活動を引き継いでくださることを、個別に伝えてきました。



濱山麻子さん。
仙台から Zoom でお話いただきました。



——2020年の秋まで、佐藤さんが住み込んでベースを運営してくださっていたのですね。でも佐藤さんが昨年末、急逝されました。

そのことは、本当にショックでした。「コロナ」の問題が起こって活動が大幅に縮小してしまうことも、まったく想像していませんでした。次々と想定外のことが起こったのが2020年でした。そしてそもそも、カトリック教会全体として、支援活動の「区切り」を2020年度末に設定していたのでした。「2020年は、一年かけて、お別れ会をしよう」と、みんなで話し合っていたのです。本当に、少し先のことも見通せないのだな、と実感させられたことでした。

佐藤光典さん。戸別訪問をして下さったときの写真です。

——そうした中で、昨年冬、カトリック仙台教区事務局様よりご相談を受け、私たちも関わらせていただけることになりました。私たちにどこまで「引継ぎ」ができるか、限界はあると思います。でも、できるだけ、皆さんの活動を引き継いでいきたいと思っています。カリタス石巻ベースの活動は、全体として、どのようなものでしょうか。

2018年から、土曜・日曜・祝日以外の日に、1階のホールで「オープンスペース」をしていました。どなたでも自由に来ていただき、ゆっくり過ごしていただく、ということを目指しました。そして「戸別訪問」もしていました。2017年に仮設住宅での「お茶会」が終わりましたから、その後の皆さんをケアできればと思い、訪問を始めたのです。私たちの訪問を受け入れてくださったのは27件のご家庭でした。月に一度は、そのすべてを訪問しました。「オープンスペース」でも「戸別訪問」でも、やはり中心になってくださったのは佐藤さんでした。そうした活動が2020年度まで続けられたのでした。

——佐藤さんは、本当に尊い働きをされたのですね。

はい。彼は2012年からカリタス石巻ベースの活動に関わってください、2015年頃にはベースの2階にあるボランティア用の宿泊施設に住み込んで働いてくださいました。元自衛官で、たくさんの資格をお持ちで、本当に皆さんから頼られていました。「オープンスペース」に集われる50名ほどの皆さんのために、旅行やクリスマス会、夏祭りなど、楽しい企画を立てて実行してくださいました。

——ここに、新しいコミュニティが生まれたのですね。

そうです。2018年からは「昼食会」が始まり、「コロナ」で活動が制限されるまで、本当に皆さん、楽しそうに過ごしておられました。「お好み焼きなんて、何年ぶり！」とか「ずっと一人暮らしだから、カレーは作らないもんね」といった声が聞こえたことが、印象に残っています。ご飯を食べながら、映画を見たり、ゲームをしたり、と、楽しく盛り上がっていました。みんなで食べるということは、本当に嬉しい、素晴らしいことだったのだと思います。



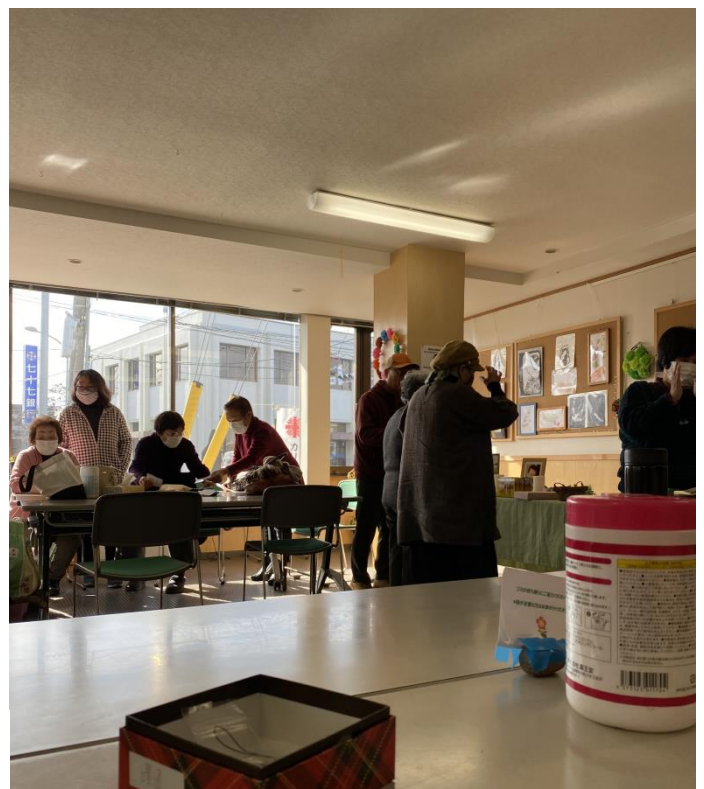
—昨年の昼食会の様子。
お好み焼きを作っています。

——佐藤さんを中心に、スタッフもチームワークを発揮したのですね。

はい。全国から来て下さったシスターの一人一人の献身的な働きは、素晴らしいものでした。そして、地元で被災された佐藤さだ子さんも、中心になってくださったおひとりです。ボランティアで関わってください、後にスタッフとなってくださいました。自宅で津波に遭って、押し入れの天袋の中で九死に一生を得た、という方です。でも、「自分は被災者として過より、みんなのために何かして過ごしたい」と言ってくださるのです。スタッフとしてのお役目を終えた後、今でも石巻ベースに来てくださって、貴重な働きをボランティアでしてくださいます。

——そうした素晴らしい活動の成果を、何とかして維持し、展開してみたく思います。今後へ引き継ぎたい思いがあるとしたら、どんなことでしょうか。

私は「何かをしてあげたい」という思いは持っていませんでした。自分は何もできないので、とにかく「一緒にいたい」と思ってきました。「みんなと一緒にいる」ということ、この「みんなで一緒に」ということが、とても大事だと思ってきました。「みんなで楽しく、気持ちよく」ということを考えてきたのです。カリタス石巻ベースに通ってきている方は、本当にいろいろな体験をされました。「被災」と一口に行っても、お一人お一人、千差万別です。ですから私たちは「被災地支援」という言葉の枠をできるだけ広げて、「誰でもここに來れる」ということを目指してきました。「みんなで」という思いをもって、やってきたと思うのです。そして、カリタス石巻ベースに來る方々がひとり一人、新しい出会いと友達を得てくださいました。ですから、それが広がって行けばいいな、と思います。いつか、あの場所がなくなる日が來ると思います。でもその時に「人間関係が残る」「懐かしい友達でいられる」と、そうならいいなと思っています。(了)



2021年1月20日の「オープンスペース」の様子。
ウィルス対策をしながら、佐藤光典さんの写真の前で、
みんなが集まり、語り合っています。

献金者・「3.11 メモリアル被災地復興支援プロジェクト」協力者

御芳名簿

(敬称略・順不同・期間=2020年3月14日~2021年1月28日)

西神戸教会 (宗)八尾福音教会 代表役員 道本純行 アイジエル広島福音教会 青木一芳 青柳芳明
赤崎克俊 秋山善久 浅海幸弘 安住英子・敏郎 安住英子 阿部望・典穂 阿部紀美子 安藤元昭
遺愛女子中学校・遺愛女子高等学校 飯沼一浩 井形英絵 生島幹也 池田キリスト教会 石川裕美
板橋大山教会 市川武功 市川三本教会・いずみ会 井出存祐 伊東美香 稲毛海岸教会 武内寛
猪瀬恭子 入江修 岩間節子 天満教会 菅美枝子 星野房子 上坂寛子 ウエダ シンイチロウ
上田徹 上野恋キリスト教会 上野芝教会 千葉一夫 榎本聡子 大内英宏 大谷尚子 大田龍二
大曲ルーテル同胞教会 大和田陽子 岡進 小倉徳力教会 尾関敏明 男山教会 小野寺順子
大日方由美 大日方薫 柏原繁宜 加藤啓子 改革派熊本伝道所 財務 本多ミヨ子 加藤俊行 佐竹早苗
カトリック徳田教会 大倉一美 金子哲夫 上山尚美 川崎松男 河内常男 鷹平恵美子 菊地弘生
木村庸五 祐教会 久遠基督教会 金南植 釧路キリスト福音館 国兼光子 熊谷郁子 倉石昇
黒木成人 黒澤不二男・貞子 恋が窪キリスト教会 甲子園教会 神戸改革派神学校学生会 香里教会
河野昌子 小林和代 小林喜成 近藤晶彦 近藤直枝 西條よし江 斎藤泰子 在日大韓基督教会京
都教会女性会 酒井照子 酒井徳治郎 坂内義子 柴田謙 鶴見教会 佐々木公明 佐々木秀子
佐藤由紀夫 佐藤美緒 佐藤尚弘 佐用チャペル 竹本栄子 塩田明子 松本直展 塩田隆良
塩田瑞代 柴田公文 島田祥子 清水恵子 清水弘一 清水真一 下谷教会 尚綱学院高等学校
社会福祉法人イエス団みどり野保育園 杉林則子社会福祉法人名古屋キリスト教社会館 頌栄教会 城井廣部
杉並教会新宿西教会 新所沢教会 巣鴨聖泉キリスト教会 鈴木雅子 鈴木茂 セキネヒデカズ
須磨教会 こどもの教会 スムットニー祐美 中尾猛 千葉教会 世界食糧フォーラム・仙台 瀬戸昭
精木紀男仙田典子 長嶋清 高橋通規 高松満至 竹川満里子 武田和美 武田光世 高瀬稔彦
田島龍一 田中義信 千葉一・直美 千葉あつ子 月本昭男 出口玲子 天羽道子 林 暁
東京告白教会 東京都民教会 徳島教会 徳丸町キリスト教会 戸村千恵子 取手伝道所 永井敏夫
中尾慎宏 長崎インターナショナル教会 柚之原寛史 中島隆宏 野村篤子 野口純一 中村忠男
中山信一・朝子 南部俊行 新津テイ子 西谷伝道所 新座志木教会 原科浩 有山敏 濱地正枝
新里・鈴木法律事務所 太田伸二 似田兼司 山梨教会 及川信 橋本富子 名古屋中央教会 山本常男
日本キリスト改革派岡山教会 日本キリスト改革派教会 名古屋岩の上教会 梅花中学校・高等学校
日本キリスト教会横浜海岸教会 日本キリスト教会 宇都宮松原教会 日本キリスト教会 福岡城南教会
日本キリスト教会府中中河原教会 日本基督教団下館教会 日本基督教団神戸聖愛教会 原山和子 森重男
日本基督教団陸前古川教会附設 古川幼稚園 濱民雄・道子 早坂まゆみ 日本基督教団小平学園教会
日本基督教団仙台北三番丁教会 日本同盟教団世田谷中央教会 日本ナザレン教団今帰仁教会 深尾眞理
日本福音ルーテル健軍教会 西那須野幼稚園 認定こども園鹿島幼稚園 原宿教会 子どもの礼拝 細井孝江
東所沢教会 日野神明キリスト教会 姫路野里教会 平井純子 福島のこども支援プロジェクト 森和亮
福本知恵子 藤井和子 藤原俊樹 北海道キリスト教会 ブレッシングチャーチインターナショナル
北陸学院中学校・高等学校宗教部 本田光夫 眞柄周吾 幕田君江 益田貴美子 松浦賢治 松野幸悦
松野時彦 松本芳哉 松本教会 三浦克文 水永晃子 水野雄二 三井肇 南宇都宮キリスト教会
南浦和教会 宮井武憲 村上静男 室町教会 本村大輔 盛川功 森田浩子 八尾福音教会
道本純行 社会福祉法人日本コイノニア福祉会 安田信人 山口公平 八千代ワイズメンズクラブ 守田富男
八ヶ岳中央高原キリスト教会 山河正信・千代栄 山口由起子 山下五郎 山田節子 山中伸郎
山のハム工房グローバル 山室誠・ふさ子 山森道代 バッハ・コレギウム・ジャパン 由木キリスト教会
吉岡大佑 吉田正子 四街道教会 世の光キリスト教会 李相勲 李貞妊 若月学 渡辺真悟
渡部眞澄 阿部雄悦 安藤則子 伊藤まり子 横浜港南台教会 横浜上原教会 岡本連三 中村愛基
萱島キリスト教会 甘楽教会 岸田清実 岸和田聖書教会 宮坂信章 宮崎昌久・せい子 石川尚樹
京滋キリスト者平和の会 京都丸太町教会 京都教区京都南部地区 橋本智子 橋本啓子 錦ヶ丘教会
向日町教会 国際基督教大学教会 今野七重 佐久間弘子 斎藤皓子 細川富代 坂口昌浩 坂中昇
札幌教会有志 山 信彦 酒井佳子 春名恵容 小高美幸 小坂井勉 新生釜石教会 森田喜之
清瀬グレースチャペル 聖書キリスト教会 のぞみ教会 西宮一麦教会 西尾和加子 青戸教会・子ども礼拝
石井智恵美 石巻栄光教会 川上政孝 川島敬子 増田陽一 大宮まぶね保育園 大橋久三郎
大坂水上隣保館 池田五月山教会 田園江田教会 渡邊信 渡邊邦子 東中野教会 桃谷ちよ
同志社教会 南山教会 日本キリスト教団 児島教会 日本キリスト教団京都上賀茂教会 萩原邦子
日本バプテスト連盟金沢キリスト教会 樋口法生 尾関幸子 尾崎千英子 富士吉田キリストの教会
福井紀子 福田一彦 北海道キリスト教会 名古屋グローリアスチャペル 木下和好・恵美子 引間春一
門司大里教会 友愛幼稚園 鈴木基行・眞理 鈴蘭台教会 櫻井志穂子 濱田辰雄 高橋伸多・秀代
石巻広域ワイズメンズクラブ 311 メモリアル復興支援プロジェクト 熊本水前寺ワイズメンズクラブ 匿名 (多数)

みなさまのご献金・ご協力に心から感謝いたします。

会計報告

2021年2月23日 東北ヘルプ事務局

「700万円」の予算で進めてまいりました本年度も、間もなく終わります。下記に、直近の理事会に提出した現在の会計状況をお示しします。「ワイズ」とありますのは、販売事務をお預かりしている「3.11メモリアル」の代金収入です。それはそのまま、ワイズメンズクラブへ送金されますので、表の中に特記しました。

ここまで守られ支えられましたことを、心から感謝しています。

大きなこととしては「持続化給付金」が獲得できました。財務理事の田中先生の多大なご尽力によるものです。「コロナ」の影響から「献金件数は堅調」でありながら「献金額は減少」という状況にあり、支出の削減をもって対応をしてきましたが、無事に、財務状況が持ち直しました。被災地の支援者に献金をお持ちすることもスムーズに行うことができ、本当に感謝しています。

2020年度				2019年度			
	献金件数	献金額	支出金額		献金件数	献金額	出金額
4月	63	608,955	648,504	4月決算	36	846,680	613,699
5月	29	293,003	508,759	5月決算	28	574,367	410,983
6月	22	393,534	431,418	6月決算	24	320,250	802,854
7月	39	315,500	472,797	7月決算	26	393,808	657,942
8月	28	372,752	515,403	8月決算	21	379,512	701,435
9月	21	235,540	576,944	9月決算	47	486,250	740,990
10月	22	252,700	673,533	10月決算	32	556,342	411,140
11月	55	707,107	541,906	11月決算	24	1,269,081	937,925
12月	122	1,352,247	948,372	12月決算	103	1,534,806	638,115
1月	56	914,004	505,016	1月決算	42	552,356	761,226
2月(19日まで)	35	471,431	1,020,952	2月決算	32	423,225	532,311
上記中ワイズ販売	78	475,000	2/7まで				
持続化給付金		2,000,000					
合計	379	7,916,773	6,843,604	合計	383	6,913,452	6,676,309

進捗率		持続化給付金を含む	
日数		収入	支出
89%		113%	98%
(365日で2月19日まで)		(700万円の予算対比)	

クリスマス以降の献金件数 前年度比			
	2020年	2019年	
11-2月	155	169	件
ワイズ抜き	2,501,927	3,356,243	円
11-2月	233	169	件
ワイズ込	2,976,927	3,356,243	円

前年比(ワイズ抜き)		持続化給付金を含む	
予算	件数	収入	支出
88%	99%	115%	103%

※2019年度予算は800万円

東北ヘルプ全体としては、長期的な収入の減少傾向を見据え、「2022年3月」をもって「NPO法人」を終了させることを検討し、理事会で議論を続けてきました。そうした中で今回「カリタス石巻ベース」様との協働が始まりましたから、まずはとりあえず、「2023年3月」までは法人を含めて変更なく活動を継続することとし、引き続き、その先の法人の存続について、検討を続けることとしました。

課題は二つあると思います。

第一は、人的な資源の確保です。震災当初から活動を継続している理事が、いつまで被災地にいることができるか。そこに、大きな課題があります。

各位それぞれの本務(教会など)との関係が、そこに大きく影響してきます。

第二は、資金的な資源の確保です。今年は「コロナ」の中にあっても、目標とする「700万円」の献金収入を(どうにかぎりぎり)確保できそうな見通しです。本当に感謝しています。しかしこの数年、毎年収入は100万円程度ずつ、減少しています。その中で、いつまで法人を維持できるか。そこに検討課題があります。

引き続きどうぞ、覚えてお祈りください。皆様のお心に、深く支えられておりますこと、改めて感謝いたします。

(了)

追記: 2021年3月18日(木) 午後7時半から、「東北ヘルプ」発足10周年を記念して、小さな感謝と祈禱の時を持ちます。どなたでもZoomで参加頂けます。ご希望の方は、東北ヘルプのメールあるいは電話090-1373-3652宛、お知らせ下さい。

巻末言

10年の友情・ 被災地の友情

10周年の被災地から、ニュースレターをお送りしました。

毎回、クリスマスとイースターと、そしてNPO法人の総会が終了した後、ニュースレターを発刊してまいりました。第一号は2012年の初冬に発刊していました。毎号毎号、いつも、ギリギリまでかかって編集作業をしていました。今回も同じです。毎回の発刊は、結局どこまでも、たくさんの方々のご協力とご忍耐のたまものです。本当に感謝に堪えません。

「10周年」を念頭に、被災地でも多くの事業が組み立てられていました。その熱気に「コロナ」の騒動が、まさに水をかけるかのように、やってきました。思わぬ不自由を強いられながら、それでもできることを模索し続けた被災地でした。そこから、新しい可能性が芽吹きました。今回のニュースレターの一つ一つの記事は、そうした胎動を感じていただけるものとなったように思います。

今号のニュースレターの作成作業が佳境に差し掛かった時、一冊の本が届きました。『東日本大震災：3.11 生と死のはざままで』と題されていました。電話が鳴りました。曹洞宗のご僧侶である金田諦応先生からでした。「本が出版されたから、送ったよ」というお電話でした。そして「また南三陸町の海岸を歩くから、一緒にどうか？」というご照会でした。私の手元に届いた本は、金田先生が上梓されたものでした（サイン入り、でした）。そういえば、一昨年くらいから何度か、お電話をくださって「昔話」をしていたな・・・「本を書くから、いろいろ思い出しているんだ」と言っておられたな・・・と思いつつ手に取った本の表紙には、まだ雪が残る南三陸町の海に立つ、僧侶と牧

師の後ろ姿。懐かしい、発災からちょうど一年後の、私と金田先生です。

読み始めて、すぐに赤面しました。金田先生と初めて会った時、私が「看取りの神学」と題して、ある研究会で高説をぶっていたこと。困った金田先生が「それは、死にゆく人の枕辺では語れませんね」と応じたこと。そのあとの議論（その内容を、私は、まったく覚えていません）。それを「牧師と坊さん…面白いな…実に面白い」と上機嫌に眺める、研究会の主宰者の岡部健医師。

あれから10年余が経ったのです。岡部先生も、もう鬼籍の人となりました。そして一人の僧侶が、被災地に立ち続けた日々を思い出し、一冊の本にされた。その語りに織り込まれる形で、懐かしい仲間といっしょに、この10年の私もいる。この本を読んだ妻は「この10年のあなたを見れてうれしかった」そうです。10年の友情、被災地の友情が、たしかにそこにありました。

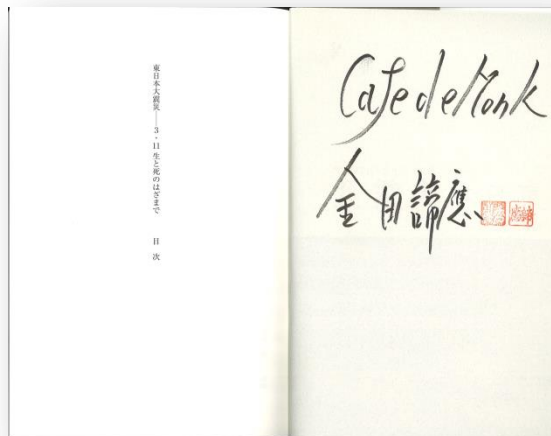
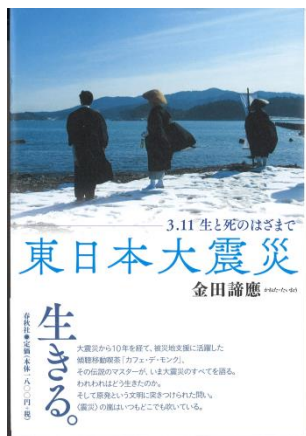
「友情」とは、古代ローマ帝国では最高の人徳のひとつとされたものです。「自分の命を懸けても大切にすべき、尊敬する誰か」を、友と呼ぶ。その友に寄せる心を友情という。当時の老賢人は「最近の人は、自分の羊の数（つまり財産）を数える人ばかりで、友の数を減らすことを忘れている」と嘆いたそうです。

巨大な被災地を前に、何もできない自分を抱きしめる。「看取りの神学」といった「知った風なこと」など、木っ端みじんに吹き飛ばされて。

そして、それでもそこに立ち尽くす。

そんな宗教者たちの姿が、その本には描かれていました。その「たった一人」の一人ずつの尊さ。その尊い「お一人」と出会えたことが、この10年の稔りだと思います。世界中・日本中におられる、被災地に心を寄せてくださる、そのお一人お一人のありがたさを、改めてかみしめながら、10年を振り返り、今改めて、被災地を見つめています。

(2021年2月23日 川上直哉 記)





支援金・献金の受付口座

【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代表 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

事務局長 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師・扶助基金実行委員会委員長）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北 郡山キリスト福音教会牧師）

監事 本村大輔（救世軍杉並小隊長）

小河義伸（日本バプテスト仙台基督教会牧師）

※届書等は、すべて2020年6月末日現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP

Per crucem ad lucem（十字架を通過して光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6 食品放射能計測所「いのり」気付 ※住所が、変わりました。

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : sendai@tohokuhelp.com